
風の音に関して私が覚えている二、三の事柄

伊亞寝一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の音に関して私が覚えている一、二の事柄

【ZPDF】

Z73520

【作者名】

伊里寝一

【あらすじ】

特に名前が売れているわけでもない、最近は少し、書くことに疲れてきた作家

彼女が住むのは、いさか柄が悪いものの、最近では珍しく、清涼な風が吹き抜けていくボロアパートメント

居心地は、悪くない

だけど、書けない

そんな日々の中で、ある日彼女は、部屋の窓越しから、ギターをかえた一人の少年と出会つ

(前書き)

学生時代に書いた作品の焼き直し版です

学生時代は、全力で小説を書けましたが、社会人になるとやうもいかず

しかし、ようやく、そういう働き方をしなければならない時期も終わり、仕事をしつつも書ける環境が整つて、もう一度、小説の世界に帰つてくることが出来ました

この作品のジャンルは「テーブルファンタジー」です
魔王も勇者もなにもない、役にも立たなければ変化もない
小さなテーブルにのつかったファンタジー

ちょっと感傷的な粗品につき、お口に合つかわかりませんが、ご賞味いただけましたら幸いです

風の音に関して私が覚えている一、二の事柄

三日振りに雨が上がった通りは、久しぶりの陽光に賑わいを見せていた。

一階の窓から見下ろすと、俯瞰の高さのせいで半分程の大きさになつた人間がちよろちよろと動き回っている。

私は、溜め息と共に書きかけの原稿をタイプライターから切り離した。

くしゃくしゃに丸めたそれを肩越しにくずかごに放り投げ、タイプライターにカバーを被せる。

煙草を銜えて火を付けると、喉の奥を刺激がくすぐつた。

とてもじゃないが、こんなに天気の良い日に仕事なんぞする気になれない。

一つ伸びをして、私は椅子の背もたれに体を倒し込んだ。

私が住むこのボロアパートの真下には、小さな噴水がある。

別にどつてことない、飾り気の少ないこの街のせめてもの飾りの一つだ。

だけど私はこの噴水が気に入つて、一体どんな奴が住んでいるんだか判つたもんじゃない、この素性の知れない安アパートに入居を決めたのだ。

もつとも、最近はこの辺りも住人を増やそうとやつになつたお上の意向で再開発が進んでいて、この広場もじきに小綺麗になつてしまつだらうが。

噴水広場からは何本かの通りが放射状に広がつてお、それぞれ

「」の田舎町の市場や住宅地に続いていた。

天気が良いとまず活気付くのは子供……と思われがちだが、今朝は子供よりも早くにアル中だの無職のおじさんだのが噴水横のベンチで気持ち良さそうに寝（？）寝を始めていた。

まあ、別段、おどろいたりするようなものでもない。元々そういう地域なのだ。

やがてまつとうな勤め人や母親達が出歩き始め、それからやつと、子供達が徒党を組んで走り始める。

窓から注ぎ込んでくる風に煙草の煙をくゆらせながら、私はぼーつとそんな風景を眺めてうつらうつらしていた。

半分眠っていた私の意識に、不意に何かが滑り込んできた。

微かな旋律。

言葉の羅列。

ギターと歌だ。

窓の下から聞こえてくる。

むにや、と体を起こして窓の下を覗くと、噴水の前で小さな男の子が流れる水を眺めながら歌を唱っていた。

今時珍しい程おんぼろの上つ張りを着て、大きすぎるギターを抱えるように演奏しながら唱っている。

「よお

窓から顔を出して手を振ると、案外早く男の子は「」に気が付いた。

手を止めて、ぼけつとした表情で「」を見上げる。

「君、見ない顔だね」

「……そうでもないよ」

小さく笑つて、男の子はまたギターを抱え直した。

それは聞いたことのない言葉で綴られた歌だつた。ぼーっとした変な旋律から、変な単語が流れ出す私は頬杖をつきながら、その歌を聞いた。

歌が終わると、少年はまた私を見上げた。

「おねえさん、気に入つた?」

「ああ、変な歌だつたけどね」

のんきなメロディと氣の抜けた声は、不思議と私の好みに合つていたようだ。

「それじゃ、お代を頂戴よ」

にいつと笑つて手を差し出す。

「ちゃっかりしてる」

つられて笑つた私は、ポケットから10マルカ硬貨を取り出した。

「いいからでいいかい?」

「んー」

「そりゃ」

ぴんり、と音を立てて親指で硬貨を弾く。ぐるぐると回転しながら奇妙なほどコントロール良く、硬貨は少年の手のひらにぽとりと落ちた。

ポケットに硬貨を突っ込み、少年が手をあげる。

「まじど、じゃあね」

「ああ、またな」

私は少年に答えて、窓を閉じた。

（）数日、やたらと暑い日が続いている。

伸びすぎていつぞつたくなつた髪の毛をかき上げ、私は煙草を一本同時に銜えた。

力を込めて吸うと、強烈なニコチンが肺を巡る。半瞬後にそれは全身に行き渡り、私は口を閉じてけだるさと咽喉を味わつた。

タイプライターに挿さつたままの用紙は真っ白。

大量の煙を吐き出しながら、私は右手をキイに滑らせた。しかし、動かない。

長い溜め息。

また、煙草を吸う。

どうにも私の頭は煮詰まつてしまつたらしい。

書こうとしても書こうとしても、手先がまるで動かない。そんな日が、もう何年も続いている。

私はそれ以上気分が落ち込むのを恐れて立ち上がると、とりあえず冷蔵庫からアイスコーヒーの瓶を取り出した。

カップに入れるのがおっくうで、そのままラップ飲みする。

安物だが冷い飲料が喉を通過していくた時、窓の下から聞いた事のあるギターの音がした。

私はまた机の側まで行くと、開け放しの窓から下を覗いた。

「よひ

声をかけると、少年は顔を上げて演奏を止めた。

「やあ、おねえさん」

「こんなに暑いのにまた路上演奏会かい？」

私がそう訪ねると少年は笑って、再びギターを弾き始めた。少年の指が弦を弾くたびに、心地よい音が噴水広場に広がる。私は片目を閉じてしばらくその演奏に体を浮かべていたが、やがて奇妙なことに気が付いた。

闘鶏おやじや酔っぱらい、阿片中毒やジャリガキ共に至るまで、誰一人として少年の音色に注意を向ける者がいなかつたのだ。まるで、そこには何もないかのようだ。

そう言えども、前に現れた時も少年は私とばかり話していた。

「おーい少年ー」

「何？」

再び演奏を中止して、少年が顔を上げる。

「お前の歌、人気ないのな」

「そうでもないよ、おねえさんは僕の歌好きでしょ？」

「でも、周りの連中はまるで聞いちゃいないよ

瓶に口を付けながら指摘すると、少年は愉快そうに笑った。

「あたり前だよ、みんなには僕の姿なんか見えりゃこないもの」「そうなのか?」

「僕の姿が見えてるのは、たぶんおねえさんだけだよ」

「へえ……」

不思議な事もあるものだ。

私が感心してくると、少年はギターを立てて顎を乗せた。

「ちょっとは嬉しそうな顔してほしいなあ」

「ん? 何で」

「つまり、貸し切りって事なんだけど」

ちょっと頬を膨らませて少年がそんな事を言つたのだから、私は思わず吹き出してしまつた。

「つづけはつけ、ああ、わかった、嬉しいよ」

「本当に?」

「ああ、嬉しいついでにもう一曲頬むよ、今度は歌付きて

「うん」

白い歯を見せた少年が再びギターを抱えるのと同時に、私はゆっくりと眠りに入つていった。

木々の緑がゆっくりと抜けていく頃、少年はまた私の窓の下に現れた。

「今日は何を演奏してくれるんだい?」

「そつだねえ、春の歌なんてどう?」

「もう秋だぞ」

私は煙草の灰を落としながら、呆れて眉をひそめた。

「秋だからだよ、来るべき春を願つて」

「その前に冬が来る」

「来ないよ」

「……来ないの?」

「来ないよ」

「本当に?」

「本当に?」

「じゃあ、もしも演目が夏の歌だつたら?」

「当然、春も来ないね」

「じゃあやつぱり夏だな」

にやつと笑つて私は腕を組んだ。

不思議そうに少年が私を見上げる。

「おねえさん、春はきらいなの?」

「そんな事はない。だけど春が来るとまた書けない一年の幕開けだからな、夏まで飛べば書けるかもしれない。」

「それでも書けなかつたら?」

「また次の夏に飛ぶわ」

私の答えに何か考え込むような顔をしたが、少年はすぐに肩をすくめて笑つた。

深緑の瞳を私に向けた後、無言でギターを構える。少年は、静かに弦を弾き出した。

大気に共鳴していくメロディ。

かすかなビブラート。

頭の後ろで腕を組んで、煙草を銜えたまま私は目を閉じた。

錆びた線路

初夏の風

流れしていく雲

私しか聞く者のいない、そんなイメージの重なりが噴水広場に広がる。

演奏が終わつた後、少年は静かにギターを置いた。

気が付くと風の臭いが変わっていた。

目を開けると、窓から見える景色が一変している。

木も濃緑に茂り、眩しい太陽。

少し、驚いた。

「……これ、どうやつたの？」

煙草を銜えたまま私は訪ねたが、少年は答えなかつた。

足下に伸びたツユクサの花を手に取つて顔を上げる。

私に向かつてひょいと放り投げられたそれは、風に乗つて私の手元にポトッと落ちた。

「最後のプレゼント」

「……最後？」

「うん、近くにまた大きなアパートが建つから、もつといには来れないと思つ。」

「……」

アパートと少年の因果関係はさりぱり解らなかつたが、彼がそう言つのなら、そつなんだろ？

私はしばらく青紫の花を見つめて、やがて少年に目を戻した。

「一つ、聞いていいか？」

「なに？」

「君は結局、何者だつたんだ？」

私の質問に、少年は悪戯っぽい微笑で応じて、ぴんつ、とギターの一弦目を弾いた。

「なんだろね」

「それを聞いてるんだよ」

「僕にもわかんないよ、気が付いたらこの噴水の側に立つてギター弾いてた」

「ふうん……」

「それより前は、いつもその窓からおねえさんを見ていたような気がする。」

「それじゃあ、妖精か何かかな」

「そんな大したものじゃないと思つたな、僕は」

少年は、うーんと腕を組んだ。

「まあ、なんだつていいじゃない」

「それもそうだな」

一人で結論にもならない答えを出すと、どちらからともなく笑顔がこぼれた。

しばらくそうして笑い合つた後、少年が片手をギターに、片手を腰に当てた。

「それじゃあね、おねえさん」

「ああ、元氣でな」

距離的に握手はできなかつたから、代わりにまた、笑顔を交わす。もう一度ひんつと弦を鳴らすと、少年の姿はまるで風のように消えてしまった。

それからしばらくの間、私は煙草の残りを吸いながらそのまま噴水広場を見つめていた。

頭の中では、まだあのんきなギターの音が鳴つてこるよつた気がする。

やがて煙草の火が根本まで進むと、私はそれを灰皿に押しつけて席を立つた。

台所から適当な大きさの瓶に水を汲んで来ると、先程のツユクサを挿して机の上に置き、タイプに新しい紙をセットする。鼻歌を歌いながら、私はタイプを叩き始めた。

机のツユクサは、青い香りを放つてゆらいでいる。

今日は、何か書けそうな気がした。

涼しさを増した風に、紅ぐ色の付き始めた葉が乾いた音を立てた。

Fin

(後書き)

執筆中BGM

遊佐未森 夏草の線路

地図を下さい

ZABADAK 夢を見る方法

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7352o/>

風の音に関して私が覚えている二、三の事柄

2010年11月6日02時56分発行